

[第32回学術集会 オンデマンド講義]

## 日本における多文化保育の現状—スウェーデンとの比較を通して

札幌国際大学人文学部心理学科 教授

品川ひろみ

保育所等の保育機関は保護者の就労を支えるだけでなく、保護者に代わり子どもの養育をするというケアの機能に加え、保護者への子育て支援の機能、そして子どもにとって必要な経験を、遊びを通して育む教育的機能を担っている。

それらの保育機関において近年、外国につながる子どもの入所が多くなっている。厚生労働省が令和元年に全国の市町村を対象とした調査によれば、回答した744自治体の実に71.1%が外国にルーツを持つ子どもが入所していると答えている（厚生労働省, 2019）。それらの子どもたちの中には、日本語を母語としない、生活も母国の文化に基づいている場合もあり、乳幼児にとって生活の場である保育所では、日々の保育に配慮が必要であり、かつ保護者とのコミュニケーションが難しいことが少なくない。これまで外国につながる子どもの入所は、外国人が集住する一部の地域に、特定の出身国の児童が多く在籍している現状であった。だが近年は外国人児童の入所は一部の地域から日本全国に広がりを見せ、子どもの出身国も多国籍化している（在留外国人統計e-Stat, 2024）。では、諸外国はどうだろう。多文化共生社会として注目されるスウェーデンはそもそも多民族で構成されている。スウェーデンでは国民の多くが外国にルーツがある。なかでも首都のストックホルムは、およそ25.8%が外国生まれであ

り、全体の34.4%が外国にルーツを持つことがわかっている（Statistics Sweden, 2023）。その様な現状でいかなる保育を行っており日本の保育と比較した場合どのような点が異なるのだろうか。

そこで本報告ではストックホルム市の保育機関を対象とした調査と日本国内の保育所の調査をもとに（品川, 2018）、保育に関するカリキュラムや日常の保育について、どのような違いや共通点があるのかをもとに日本における多文化保育の現状について検討する。

### 引用文献

- 厚生労働省「保育所等における外国籍等の子ども・保護者への対応に関する調査研究」2019.  
品川ひろみ, 2018, 「日本とスウェーデンにおける多文化保育の現状—日本とスウェーデンの調査をもとに—」『多文化保育研究』研究報告書3, 札幌国際大学短期大学部.

\*\*\*\*\*

### 略歴

研究分野は保育社会学・教育社会学。これまで日本国内で外国人児童が多く入所する地域を対象に研究を行ってきた。国外ではスウェーデンの他にもブラジルやノルウェーでの調査研究にも参加している。詳細はリサーチマップを参照のこと <https://researchmap.jp/hiromi-shinagawa>